

中島紘雄著「足利まちおこし事件簿 - シャーロック・ホームズ先生に捧ぐ - 」

下野新聞社 2009年10月30日刊を読む

1. 「こころみ学園」「ココ・ファーム・ワイナリー」の始まり - 「ピュアな心の手作りワイン サミットへ」 -

(1) シャーロック・ホームズは第一次世界大戦前夜の事件『最後の挨拶』のなかで、ドイツのスパイ、フォン・ボルクからお気に入りのインペリアル・トカイワインをせしめてワトソンと飲む場面がある。ホームズはなかなかワイン通で、探偵の捜査にあたっては科学的合理性を重んじる彼も、ワインについては音楽と同様、その神秘性やテロワール、アートフィシャルな感性をもって充分楽しんでいたようである。

(2) どうもうまい酒やワインとの出会いは、理屈や理論、科学的分析や技術、匠の技だけではなく、なにか人知の及ばぬものの力があるようだ。

(3) ちなみにホームズの生みの親、アーサー・コナン・ドイルは晩年心霊術に傾倒し、妖精の出現を信じ、その写真を発表したりもした。この本の最初の章は妖精たちがつくった奇跡のワインの話である。

P16

2. 花火でまちおこし - ふるさとの百年花火 -

(1) 足利の子どもたちが夏休みにかく絵や作文(絵日記など)で最も多いのは、昔から「花火」である。それは太平洋戦争が終った時に小学生だった私たちも、その子どもたちも、そしてその子たちの子(私の孫たち)も変わっていない。

(2) 足利から他所へ嫁いだ女性は、昔からお盆よりも、8月の第1土曜日の花火大会に里帰りするものが多かったという。

移り気で、新モノ好きで、計算高い足利人が百年もの間、この祭りを続けてきたエネルギーは、いったい何であったのか不思議でならない。

(3) シャーロック・ホームズは、19世紀末にロンドンを中心に活躍した名探偵である。サー・アーサー・コナン・ドイルによって書かれたその冒険物語は、世界56ヶ国以上で翻訳されていて、世界中で聖書に次ぐベストセラーだと言われている。ホームズを熱烈に愛し、研究する人たちはシャーロキアンと言う。この人たちは、ドイルの書いた60篇の物語を聖典と呼び、ホームズがあたかも実在の人間であるかのように検証し、自国の名所や著名人と関わりがあったというような物語を書いたりして楽しんでいる。

(4) 足利の花火はホームズが生まれて 50 歳ぐらいの時、国際的な難事件を次々と解決している時期に最も盛んで、それから 100 年も続けられている。私は足利の花火に照らされているホームズのシルエットを夢みている。

P74 ~ 75

3 . 足利友愛義団の起こり - それは 100 年前に遡る -

(1) シャーロック・ホームズの冒険物語なかで、ホームズが巧妙に仕組まれた銀行強盗事件を見ぬき、犯罪を未然に防ぎ銀行を救う話が『赤毛組合』である。この話はシャーロキアンの間でも人気があり、生みの親のコナン・ドイルも気に入っているという。物語の舞台になるのは 1890 年のロンドンのシティにある銀行である。この時代、産業革命が興り、経済の飛躍的發展により銀行も多く設立され、金融資本主義の謳歌により大英帝国の繁栄と犯罪がもたらされる。そこで活躍するのがシャーロック・ホームズである。

(2) 1890 年といえば、その 5 年後の明治 28(1895)年に日本でいまだ市にもなっていない地方のちいさなまち「足利」にできたのが「足利銀行」であった。

(3) 21 世紀になり IT 社会とグローバル化により金融資本がギャンブルのように世界を席卷して益々巧妙な犯罪が横行している。

(4) こんな時代にホームズ先生ならどんな解決をしてくれるのだろう。

P162

[コメント]

地域総合文芸誌「足利文林」の主宰者であられる、中島糸雄氏の待望の第 3 作目がようやく出版された。

氏は、知る人ぞ知るシャーロキアン。現代のシャーロック・ホームズなら我が街足利をどのように見るだろうかと書かれた興味あふれる一冊。街づくりの優れた教科書として高く評価させて頂きたい。

- 2009 年 11 月 14 日林明夫記 -